

挫折を乗り越え見つけた 新たな自分。

福山教会 Aさん

Aさんは、平成20年4月に中学校の英語教師となった。2年目にはクラス担任として忙しい日々を過ごしていた。ところが、生徒たちの心がばらばらなクラスの状態に、きちんと向きあえない自分を責め、出勤できなくなるほど悩み苦しんだ。そんなAさんを心配した両親は休職させ、実家に連れ帰る。母は娘の立ち直りを願って、先輩教師や、さまざまな人に助けを求めたが、心は固く閉じたままだった。そんな重苦しい状況に光明が差すのは平成24年4月のこと。相談にのってくれていた仲間たちがずっと心配し続けていることを知ると、「このままではいけない」と決意し、その輪に飛び込んでいった。多くの人との関わりの中で自ら心を開き、相手と真正面から向きあえば、そこに新たな世界が展開することを学んだ。挫折を味わうのはつらいが、それがあったからこそ新たな自分に出会えるのだと気づく。現在、Aさんは教育現場に復帰。希望を新たに英語講師として活動している。



「苦悩」と「苦勞」

同じ苦しい状態でも、漢字で「苦悩」と書くときの「悩」は「心を乱す、思いわずらう」という意味で、これは頭のなかで問題が「停滞」し、堂々めぐりしている感じがします。一方、「苦勞する」というときの「勞」は、「つとめや仕事の疲れや骨折^{ほねお}り」をさし、そこには問題を、歩前に進める「動き」があります。それは、水が冷たいか暖かいかは、それを自ら味わってみればわかる、という意味の禅語「冷暖自知^{れいねんじちじ}」に通じる得難^{えがた}い経験にもなるのではないのでしょうか。

昔から「苦勞人」というと、数々の逆境に遭^あいながら、それが血肉となつて世間の事情によく通じ、人間としての心の幅や器の大きさが感じられる人をいいます。

そのような意味でも、悩みや苦しみに直面したときには、体を使って「何かやってみるほうがいい」でしょう。そうすると「苦悩」が「苦勞」に変わります。その経験は、思慮^{しりよふか}深さや視野の広がり、心の柔軟性や思いやりの深さなど、それぞれに人間的な魅力をもたらしてくれるはずですよ。

立正佼成会